

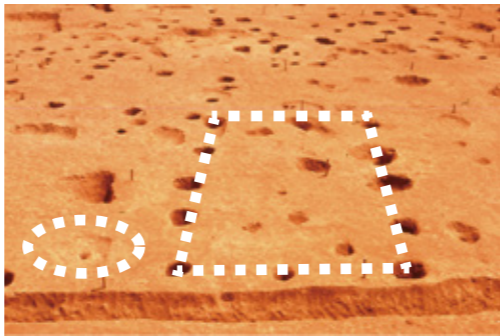
史跡水池土器製作遺跡は、昭和 51 年に発掘調査が行われ、奈良時代前期（8 世紀前半）に土師器を焼いた「土師器焼成坑（以下、焼成坑）」が 16 基も発見されました。焼成坑の数だけを比較すると、北野遺跡や戸峯遺跡群の方が大規模ですが、水池土器製作遺跡には注目すべき特徴があります。

遺跡からは、掘立柱建物（黄色）4 棟や方形竪穴（緑色）3 基、井戸 1 基なども見つかり、焼成坑（赤色）を含めたそれぞれの位置関係は、下図のようになります。焼成坑は掘立柱建物を囲むように半円状に並んで配置されています。また、掘立柱建物の脇には土器を作るための粘土を溜めておく不正形の穴（紫色）も見つかり、採取してきた粘土を保管し、掘立柱建物では粘土を練って土器を形作り、焼成坑で土器を焼いていたと想定されます。加えて、方形竪穴は住居とするには面積が小さく、簡易な建物であったと想定されます。このため方形竪穴は、土器を作る工人が食事を作る厨房であったと思われます。

このように、水池土器製作遺跡では、土器生産に伴う一連の行程に関連する施設が揃っている特徴が認められ、昭和 52 年に国史跡として指定され、公園として整備されています。



連なって造られた土師器焼成坑



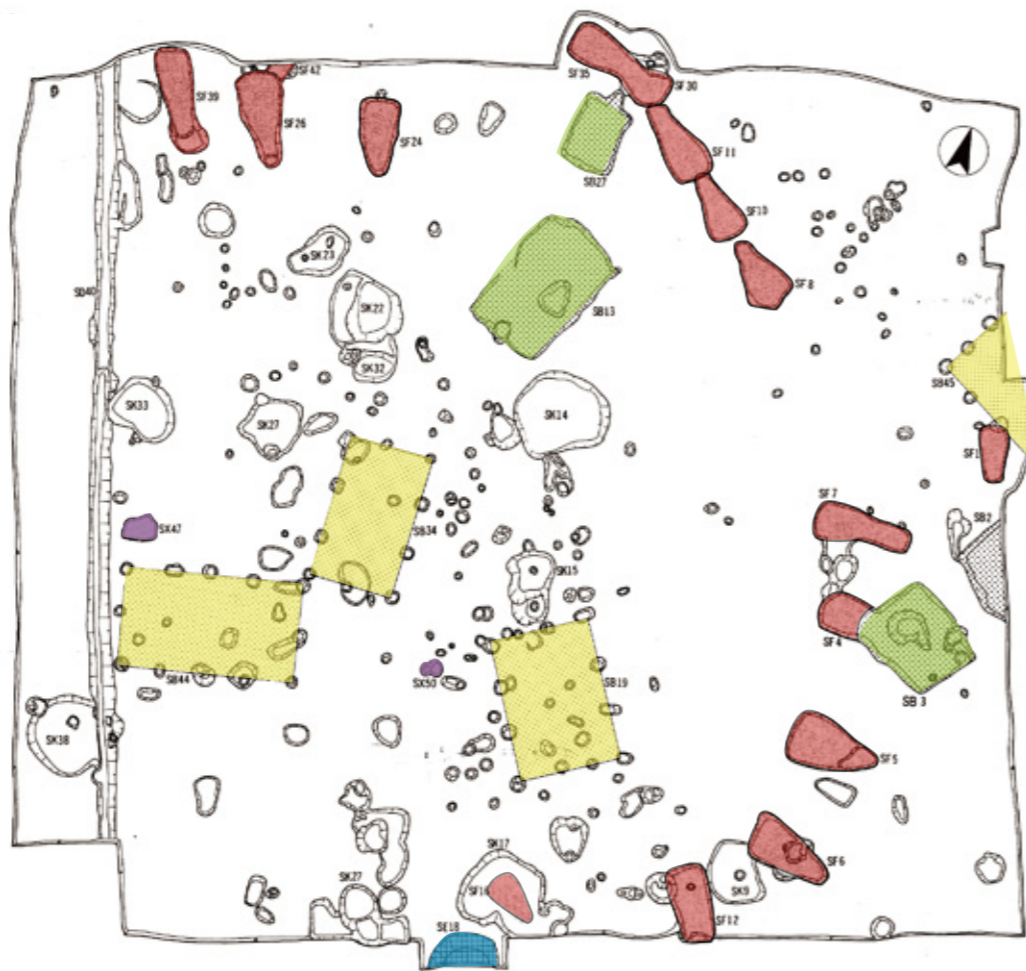
掘立柱建物と粘土溜



出土した土師器



現在の水池土器製作遺跡



水池土器製作遺跡 遺構略図

- 土師器焼成坑
- 粘土溜
- 掘立柱建物
- 方形竪穴
- 井戸

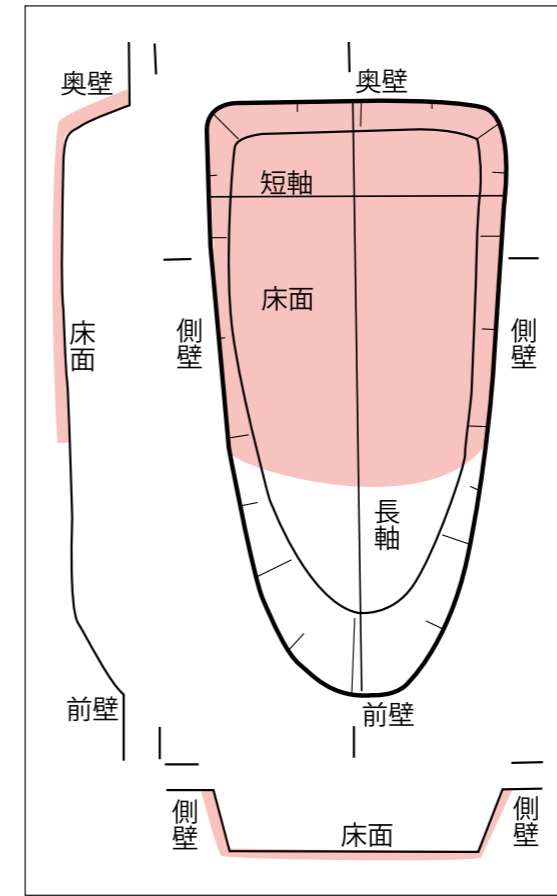
明和町は、天皇に代わり伊勢神宮に仕えた齋王の住まいと齋王を支えた役所齋宮寮があり、古代から伊勢神宮と関わりが深い土地柄です。また、神宮で用いる土器を製作する神宮土器調製所や、神宮に奉納する着物と関わりが深い「上御糸・下御糸」などの地名が残っており、齋宮跡のみならず明和町全体が伊勢神宮と深いつながりがあります。

今回は土器づくりに関する明和町の遺跡を通して、明和町が古代から現在にいたるまで土器づくりに深く結びついてきたことをご紹介します。

土器を焼く—土師器焼成坑—

発掘調査では、地面をきれいにけずり、土の色の違いなどから、昔の柱穴や住居の跡（遺構）を探します。明和町で調査を行うと、赤く変色した土のブロックを含む二等辺三角形の特徴的な遺構に出会うことがあります。遺構を掘り進めていくと、側面や底の部分が焼け赤く変化しています。

これは、「土師器焼成坑」と呼ばれ、土器の中でも素焼きの「土師器」を焼くための窯です。



土師器焼成坑模式図



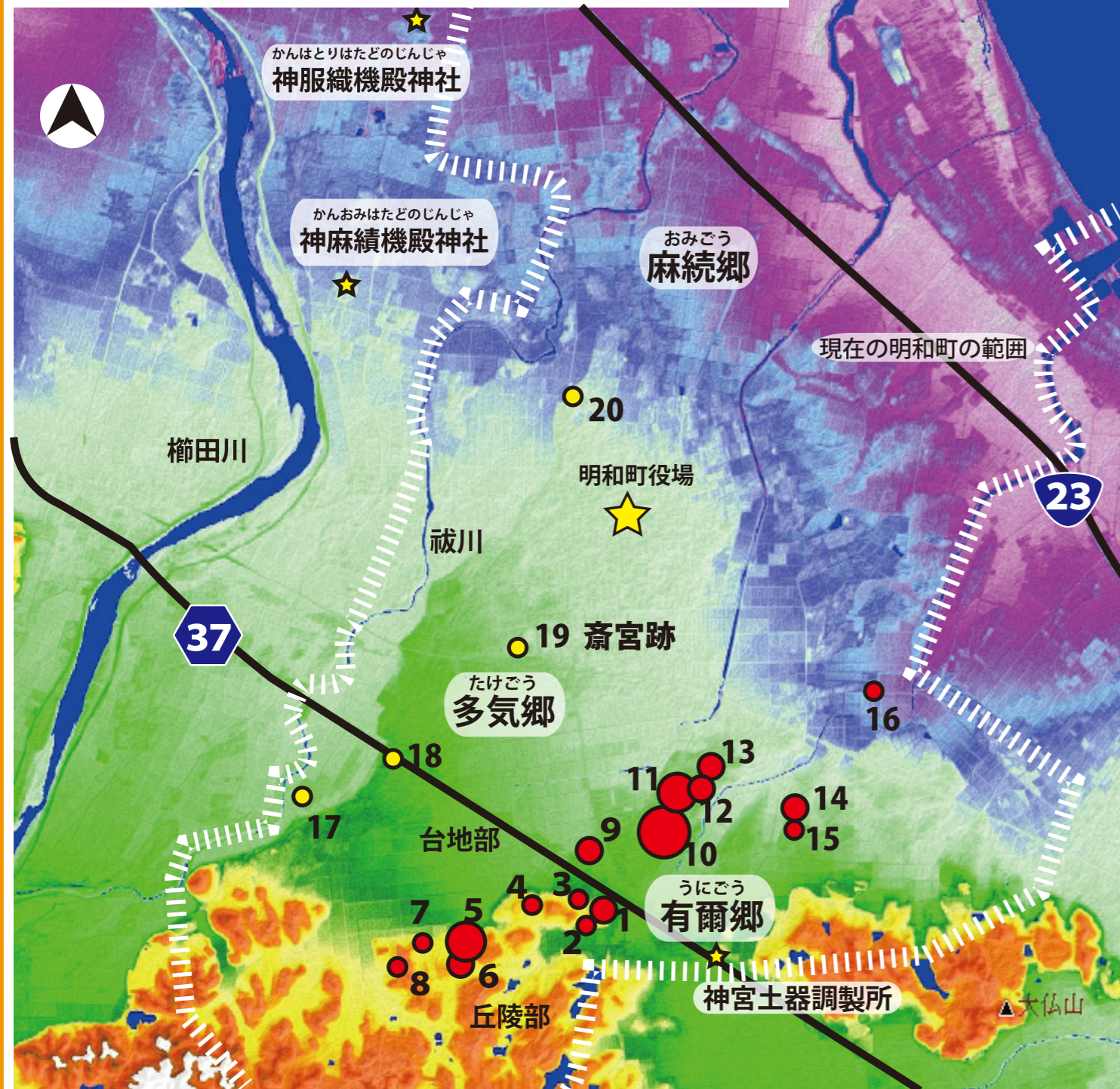
古堀遺跡で見つかった土師器焼成坑

明和町における土師器焼成坑の特徴

- ・6 世紀中頃から 8 世紀末頃までの約 250 年間継続している。その後も土器生産が続けられるが、遺構として明確な事例は少なく不明な点が多い。
- ・平面形は二等辺三角形に近いもので、円形や方形はない。
- ・大きさは横軸 1.5 ～ 2.0m・縦軸 3.0 ～ 4.0m の間におさまるものが多く、時期が新しくなると縦軸が短くなる傾向になる。
- ・屋根はなく、ワラと泥土をかぶせた覆い焼きによって焼かれたと考えられる。

※本解説シートでは、古代の土器焼成に関わる遺構に限り「土師器焼成坑」と呼称します。

明和町における土師器焼成坑の分布と古代の地名



- 100 基以上
- 50 基以上
- 10 基以上
- ● 1～9 基
※黄色は有爾郷外と想定される遺跡

緑色部分が標高10m以上、薄い緑色部分は標高5m以上を示す。
青色、紫色部分は標高5m未満の低地部。

No.	遺跡名	土師器焼成坑検出数
1	発シA遺跡	6
2	発シB遺跡	16
3	垣場遺跡	6
4	長五郎林B遺跡	2
5	戸峯A遺跡	75
6	戸峯B遺跡	25
7	大道A遺跡	2
8	世古D遺跡	5
9	堀田遺跡	20
10	北野遺跡	228
11	古堀遺跡	61
12	仲畑遺跡	15
13	安養寺跡	28
14	水池土器製作遺跡	29
15	黒土遺跡	4
16	曾祢崎遺跡	3
17	川原口遺跡	1
18	金剛坂遺跡	3
19	斎宮跡	3
20	粟垣内遺跡	2
合計		534

とみね 戸峯A遺跡・戸峯B遺跡 池村字戸峯

戸峯A遺跡・戸峯B遺跡では、北野遺跡に次いで2番目に多い100基の土師器焼成坑が見つかります。遺跡は標高48mほどの丘陵の斜面に位置し、時期は8世紀頃に属します。

土師器焼成坑は、奥壁部分が斜面の高い部分になるように作られており、前壁部に溝を伴う特徴的なものも見つかっています。



斜面に沿って造られた土師器焼成坑



前壁から溝がのびる土師器焼成坑

明和町に集中して分布する土師器焼成坑

三重県内で土師器焼成坑が見つかった遺跡は27遺跡あり、土師器焼成坑の数は557基あります。

その内、明和町で土師器焼成坑を検出した遺跡は20遺跡・534基（平成28年時点）と膨大です。また、明和町以外の7遺跡の内、2遺跡は隣接する玉城町の遺跡で、分布位置は明和町南部から玉城町北部の丘陵部から台地部の範囲に集中しています。さらに、町内には古代以降の土器生産に関わる遺跡が存在することも注目されます。

土師器焼成坑の分布及び発見数が集中する範囲は「伊勢国多気郡有爾郷」が存在したと想定される部分と重なります。長年の発掘調査によって見つかった多数の土師器焼成坑は、古代から伊勢神宮に調進する土器を作り続けてきたとされる「有爾郷」の特徴を裏付けるとともに、その領域を示唆しています。

※ただし、明和町を除く県内の遺跡数・基数は平成8年時点のものです。



1年間に焼かれた土器の数

たくさんの土師器焼成坑が発見されていますが、1年間でどれだけの量の土器が必要だったのでしょうか。

『皇太神宮儀式帳』（延暦23(804)成立）という8世紀末頃の史料を調べた小林秀氏の研究（「中世後期における土器工人集団の一形態—伊勢国有爾郷を素材として—」）によれば、伊勢神宮に対して、31種類の土器が作られ、その個数は土師器3660個、須恵器1881個、合計5141個にもなります。この内、土師器焼成坑では土師器3660個が、明和町を中心とした有爾郷で生産されたと考えられます。

ただし、史料の個数は伊勢神宮に調進する土器の数であり、斎宮跡で使用された数は含まれていません。斎宮跡には、天皇に代わり神宮に仕えた斎王を支える斎宮寮という役所がおかれ、多くの役人が勤めていました。このことから、有爾郷ではさらに大量の土器が生産され、伊勢神宮や斎宮寮に供給されたものと推定されます。

